

再生産される「子どもらしさ」

—好ましい子どもをめぐる語りから—

池 田 曜 子

1. はじめに

本稿の目的は、教師と子ども自身によって語られる「子どもらしさ」から、それぞれがどのようなイメージを抱き、「子どもらしさ」をどのように活用しているかを明らかにすることである。

「子どもらしさ」について考察するには、まず、誰を「子ども」とするのかについて、ある程度明確にしておく必要がある。アリエス（訳書 1980）による「純粹無垢」という特性を持つ「子ども」概念が近代になって誕生したことはよく知られているが、現在の日本における「子ども」という語に含まれる範囲を厳密に定義することは非常に困難である。辞書にも多数の意味が掲載されており、これまで蓄積されてきた研究も加えるならば、簡単に定義できるものでないことは明らかである。しかし、この議論は本稿の目的ではない。本稿では、研究者ではなく現在の日本で日常生活を営む教師や子どもが使用する際の「子ども」とは何をさしているのかについて確認することを必要としている。そこで、一般的に子どもと大人を区別する基準として用いられやすい発達段階によって、一旦、定義しておきたい。『広辞苑』（2008）では「幼いもの。まだ幼く世慣れていないこともいう。」とされており、『明鏡国語辞典』（2010）では「まだ成人していない人。児童。小児。」とされている。その他複数の辞書にも同様の意味が掲載されている。これらの辞書で述べられている内容を発達段階にあてはめるならば、幼児期から児童期、青年期の一部にあたると考えら

（いけだ・ようこ 流通科学大学）

れる。辞書を手がかりとして子どもを定義するならば、「学齢期前の幼児期から青年期中期にいたるまで」とすることができるだろう。この範囲に関しては、様々な異議も出てくるだろうが、本稿では非常に簡略化して以上のように定義しておきたい⁹⁾。

だが、「子ども」の範囲を定めただけでは「子どもらしさ」とは何かを考えるには不十分であり、「らしさ」という語に含まれている意味についても何らかの定義をしておく必要がある。子どもと同様に、この語も明確に意味を定めることは困難であるが、神田・高木（2013）では、『らしさ』という概念は個人によって異なる概念であり、実態不明の曖昧なものであるといえよう。しかし、『らしさ』は繰り返しディスコースにおいて表象され、それが社会で共有される『イメージ』となって再生産される。そして時には守るべき規範として奨励されたりもする。」（神田・高木 2013, p.i）とされている。さらに、大橋ら（大橋・大橋 2013）は、電子掲示板での投稿から「らしさ・らしい」に関わる語を抽出して分析を行い、その結果、「子どもらしさ」や「女らしさ」など「らしさ」という語をつけて人が語る場合とは、「未来の様々な意味解釈に向き合う時に用いられ意味の想定枠すなわち期待の構造として使われる。」（大橋・大橋 2013, p.61）としている。つまり、「らしさ」は、その語が使用される事象に対して、好ましい属性や資質があると期待され、さらには奨励されるべき規範として用いられることもあるのである。

このように考えていくと、「子どもらしさ」は、「好ましい、またはこのようにあってほしいと期待される、学齢期前の幼児期から青年期中期にいたるまでの規範の1つである」とすることができるだろう。そこで本稿では、「子どもらしさ」を好ましいとされる子どもの状態、またはイメージととらえ分析を進めていきたい。

筆者は、これまで小学生から大学生までの友人関係に関して、フィールドワークやインタビューの結果から分析を行ってきた。その中でふとした時に、好ましい子どもに関するイメージが表現されたり言及されたりすることがあり、そのたびに興味深く感じていた。これは、教師の語りの中で、実際に好ましいと感じている子どもとして言及される場合もあるが、反対に、違和感を覚える子どものイメージから浮き出てくる場合もある。子どもたちも同様であり、好ま

しいと感じている場合だけでなく、好ましいと思わないにもかかわらず他者はその状態の方を好むことを自明としている場合もある。

好ましい子どもというイメージは、一見些細なもので、ただ個々人が持っているだけのものであると感じられるかもしれないが、本当にそうだろうか。さらに、小学生・中学生・高校生自身が懂れたり、好ましいと感じたりする互いのイメージと、教師が描いている好ましい子どもの状態は、異なるものなのだろうか。また、そのイメージは、本当に日常生活には何の影響も及ぼしていないのだろうか。本稿では、以上の問題意識にもとづいて、教師、子どもによって語られる「子どもらしさ」とその活用について明らかにしていきたい。

2. 分析の枠組み

好ましいとされる子どものイメージは、生まれた時から個人の中にあるものではない。この様なイメージは、当該社会で日常生活を送り、他者と関わることから形成される。ゴフマン (1974, 訳書 1974, 1980, 1985) は、人がともにいる場面 (共在) を研究対象とし、その場にもともに出会う人間のあいだにおこるすべてのことを含む、相互作用が行われる共在場面個有の秩序を克明に描き出している。共在の場とは、人は他者とともにあり、その中で無限に続く相互干渉によって社会経験が実感されていることである。このとき、人は、「すべての状況にあてはまる行為の規則は『状況にふさわしい』行為をせよ」(Goffman 訳書, 1980, p.12) との前提により、周囲の価値観や動きに適応しようとする。これは、「出過ぎでもいけないし、場違いであつてもならない。時には、自分あるいは他人がそうでないことを知っていても、状況に適合しているかのように振舞わなければならない」(Goffman 訳書, 1980, p.13) ということである。そして、このような共在の場において、既存の相互行為プラクティスを習慣的に採用し、一種暗黙の「作業合意」(Goffman 訳書, 1985, p.7) をその場にいる人々が行うことによって、相互行為秩序が生まれるのである。プラクティスとは、これまでの習慣の中で一定程度パターン化された、行動様式、外見、言語行動、価値意識などであるため、換言すると、人々の日常生活における絶え間ない行為を通して、相互行為秩序は形成されているということ

である。ならば、共在の場である日常生活の中で、人は幼い頃から好ましい子どもとは何かを、会話や行動から無意識のうちに感じ取り、一定の価値基準としてとらえ実際に振る舞っていると考えられる。相互行為秩序は、人々のたえないふさわしい関与によって支えられているのである。

相互行為による秩序世界は、「些細なきっかけで反転、変貌、崩壊しかねない、毀れものの世界であり、それゆえまた、われわれに緊張や困惑、安堵や無自覚を迫る世界」（安川 1991, p.3）でもある。人は、好ましい子どものイメージを規範として認識するだけでなく、日常生活においてたびたびその価値基準を適用し表現することによって自分の属する秩序世界を維持し安心感を得るとともに、それ以外の価値基準や行動を排除している。相互行為秩序を維持し、自分の社会的立場を安定させることは、安心して社会生活を送るうえで重要なことなのである。

そのためには、適切な内発的関与の表現であるプラクティス運用の熟達が必要となる。適切なプラクティス運用のためには、適切なフレーミングが必要である。フレーミングとは、出来事をカテゴライズし、経験としてまとめることであり、私たちは、日常生活の経験の中において、すでに自分自身のフレーミング作業の中にいることになる。フレーミングは、フレーミング慣行(Goffman, 1974)によって無意識のうちにに行われていることも多い。しかし、フレーミングは、常に明快なわけではなく、フレーム破綻やフレーム誤用、さらにフレームの読みかえによるフレーム転調によって、思いもかけない結果を引き起こすこともある。フレーミングを誤る者は、同じ集団に属しているとはみなされず、相互行為秩序を乱し、崩す可能性のある者として排除される。さらに、フレーム破綻やフレーム誤用を見たり経験したりすることは、周囲にそのフレームを再認識させ、強化していくことにもつながる (Goffman 訳書, 1974)。

このような Goffman のフレーミング理論を「子どもらしさ」に適用するならば、人は、好ましい子どものイメージを、日常生活内での自分の行動や表現に対する他者の反応だけでなく、そのように評される子どもの状態を実際目にしたり、メディアなどから情報を得たりすることによって、無意識のうちにまとめあげていることになる。さらに、「子どもらしさ」は、好ましくない子どものイメージの情報を得ることによって、さらに強固な規範として作りあげら

れていく。

ゴフマンの研究から「子どもらしさ」について考えてみると、人間が一定の「子どもらしさ」を日常生活の中で常に更新するだけでなく、より強い価値基準として形成していく過程を改めて確認することができる。

しかし、現在、「子どもらしさ」とは何かについて、意味を問い直す人はいるのだろうか。自明のものとして日常生活の中で使用してしまっていることの方が多いのではないだろうか。この様にとらえるなら、すでに「子どもらしさ」は言説となっているのかもしれない。そして、好ましいとするイメージが含有された「子どもらしさ」として語られ、「あたり前」の常識的な枠組みとなり、日常生活における行動や判断の価値基準として用いられ続けているのである。

3. データの概要と手続き

本稿で使用するデータは、これまで筆者が行ったフィールドワークまたはインタビューによる。しかし、本稿の目的である教師が描いている好ましい子どもの状態や小学生・中学生・高校生自身が抱く好ましいと感じる互いのイメージの分析には、1つの調査データでは対象が不十分であるため、2つの調査結果を用いて分析を行いたい。

第1のデータである小学生とその教師に関しては、200 m年から200 m+1年の1年間、関西圏の公立小学校でのフィールドワークの結果を使用する。このデータは、小学3年生を対象に、週に1、2回朝から放課後までの教室での行動と、放課後に校庭や近くの公園などで遊んでいる場面の参与観察、子どもと教師へのインタビューによるものである。担任は、50代の女性教員である。学校の環境は、核家族主体の新興住宅地と3世帯以上の大家族主体の旧村地域が混在していたが、近隣からはおちついた学校であると認識されていた。

第2のデータである中学生と高校生とその教師に関しては、200n年から200n+4年までの4年間、関西圏の中等教育学校でのフィールドワークの結果を使用する。このデータは、中学2年生、中学3年生、高校1年生、高校2年生の4学年各1学級を、4年間継続して調査したものである。データの内容は、週に1回主に授業中、休み時間、放課後の参与観察、子どもと教師を対象とし

たインタビューによるものである。インタビュー対象とした教員は、担任だけでなく各教科担当の教員も含まれている。学校の環境は、自由で自立した人格の育成と多様な能力に対応した教育を行うことで有名な名門校として近隣では認識されており、家庭環境のばらつきは少なかった。

以上2つのデータを用いるが、これらのデータは、すべて2000年以降10年以内に行われた調査によるものであり、それぞれのデータ間に大きな社会状況などの環境変化はないと考えられる。

4. 語りにみられる「子どもらしさ」

ここからは、教師と多様な学校段階の子どもたちによる「子どもらしさ」をめぐる語りをとりあげ分析していきたい。本章で用いる語りは、子どもとはどのようなものかを話題として聞き取りを行ったのではなく、フィールドワーク内やインタビュー調査内での異なる話題の中で語られたものである。

4.1. 教師によって語られる「子どもらしさ」

教師が日常子どもと接する中で、それぞれの子どもに違いがあることに気づいていることは想像に難くない。それでは、教師は、すべてのタイプの子どもを好ましいととらえているのだろうか。それとも、一定のタイプの子どもに対してだけ「子どもらしさ」を感じているのだろうか。

4.1.1. 好ましい子どもとしての語り

まず、小学校教師が語る好ましいと感じられる子どもについてみていきたい。この語りは、クラスの状態について、小学3年生の担任であった50代の女性教員と放課後雑談している時に出てきたものである。

【語り1】小学校教師による好ましい子どもに関する語り

教師A：うちのクラスのaくん、今日も元気やったわ。

筆者：そうですね。aくんは、クラスの中でも特に目立つ気がします。

教師A：うーん。お兄ちゃんが2人もおって、さらにやんちゃ いたずら好

き] やからなあ。時々、あーもう、いい加減にしてって思う時もあ
んねんけど、憎めへんのよね。なんていうか、やっぱり可愛いなあっ
ていうか、見ててつい一緒に笑ってまう感じになるんよね。

筆者：aくんは、私も見ているだけで、つい一緒に遊んでいるというか巻
き込まれてしまっている時があります。放課後も元気ですよ。

教師A：そうそう。うるさいし、時々やりすぎんともあるけど、可愛いん
よね。とにかく可愛い。やっぱり子どもは素直で元気でおらんとね。
私も、帰りに見かけたらつい声かけてまうもんね。

小学校教師の語りからは、クラスで特に目立つaについて、どのように教師
が感じているかがよく表れている。aは、授業中も学習以外のことに気を取ら
れてしまったり、休み時間も友だちに対してつい手が出てしまったりすること
から、問題点も多く指摘される子どもでもある。しかし、いたずらも単純で衝動
的なものが多く、その行動にはつい周囲も一緒に笑ってしまうことが少なくない。
これは、問題行動があったとしても、それ以上の好ましさがあるからだ
と考えられる。教師の「とにかく可愛い。やっぱり子どもは素直で元気」という
発言には、好ましい子どものイメージが強く表れている。

それでは、中学校教師の好ましい子どもとはどのようなものだろうか。つぎ
の語りは、中学2年生の担任だった30代男性教員によるものである。この語
りは、放課後にクラスの子どもたちについてインタビューしている時のもので
ある。

【語り2】中学校教師による好ましい子どもに関する語り

教師B：そういえば、池田さん、今日のb見た？

筆者：見ました、見ました。授業中に頭にスーパーの袋かぶってましたね。

教師B：ほんま〔本当に〕笑ってしもたわ。あいついつもあんなん〔あのよ
うな様子〕ですよ。見たまんまですわ。

筆者：えっ。いつもあんなに不思議な行動に出るんですか？

教師B：不思議というか、面白い感じやな。ノリがめっちゃいいからな。あ
いつもああ見えて、やったらあかん時にはしよらん〔行動しない〕

から。授業中もあいつうるさいでしょ。

筆者：そうですね。いつも口をはさんでいますね。

教師 B：そうやねん。でも、あれも結構クラスの雰囲気とか、授業の流れ作るのに役に立つんですよ。とりあえずみんなの気持ちがのってくるためにも、ある程度、元気というかパワーみたいなもんが必要やから。ありがたいんですよ。

中学校教師の語りからも、小学校教師と同じキーワードが出てきている。中学生に対して可愛いという表現こそ出てこないが、「元気」「一緒に笑ってしまう」「見たまんま＝素直」という言葉はほぼ共通している。さらに、a も b もクラスのムードメーカーであり、クラス内で明るい雰囲気を作り上げる、またはやってみようという雰囲気を教師が演出するために一役買っている。b は、授業中に勝手な発言が多く、学習外の突発的な行動が多々見られる子どもである。しかし、教師にとっては、それ以上に好ましい特性を持った存在であることを語りからみることができる。

最後に、高校教師の語りもみておきたい。筆者がフィールドワークを行った場所は中等教育学校であったが、それぞれ中学校と高校に相当する学年では、子どもたちにも大きな変化が見られるため、担任や関わる教師たちの反応も異なるものであった。【語り 3】は、高校 1 年生の担任であった 30 代女性教員によるものである。この教師 C のクラスは、筆者が中学 3 年生時も観察しており 2 年続きの観察となったため、前学年との違いをたずねていた際にこの語りは出てきた。

【語り 3】高校教師による好ましい子どもに関する語り

教師 C：やっぱり 4 年生〔高校 1 年生〕になるとある程度は変わってきますよね。多少はしっかりしてくるというか。でも、やっぱりうちの〔この学校〕子たちは、子どもっぽいというか。まだまだ高校生って感じじゃないですね。

筆者：授業中の雰囲気は、ある程度落ち着いてきたような気もするんですけど。

教師 C：それはね。内容もやっぱり難しくなってくるから、今までみたいに遊んでばかりじゃね。でも、やかましい子たちはそのまんま
しよ。

筆者：あ、c くんとか。d さんとか。

教師 C：そう。女子は大分しっかりしてるけど、男子はあかんね。いつまでも子どもで甘いところがあるでしょ。そこが可愛いところでもあるんやけど。c は、身体は大きくなってきてもやっぱり単純で子ども
みたいなんが抜けないんですよ。

筆者：それって先生どう思われます？

教師 C：どうかなあ。早くしっかりしなあかんって、いつまで子どもなんだとも思うし、見えて和むのも確かやから、男子はいつまでも子ども
のところがあるのかなとも思いますね。なんだかんだいって、女子も受け入れやすいし、つなぎ役としてああいう部分って必要なんか
もありませんよね。

高校教師の語りからは、はやく自立してほしいと言いながらも、「単純＝素直」「やかましい＝元気」「見えて和む＝一緒に笑ってしまう」というこれまでみてきた語りと同様のキーワードが出てきており、その評価も肯定的なものとなっている。そして、その態度を子どもみたいと評し、これは驚きであるが小学校教師と同様の「可愛い」という印象が語られている。

以上の各校種の教師たちによる好ましい子どもとしての語りからは、多少問題行動が伴っていても、素直で元気があり一緒に笑ってしまうような子どもを可愛いととらえ、好ましいと感じていることがみてとれる。それも、教師の性別や年齢に関係なく、同様の印象が語られていることは非常に興味深い。さらに、小学生、中学生、高校生に対して教師が求める態度や行動は変化してきているにも関わらず、好ましいと感じる子どもの状態に大きな変化は見られないのである。このように、教師の求める「子どもらしさ」が小学校から高校までほぼ変わらないということは、子どもたちはその間フレームの転調などはほとんどなく、ほぼ同じフレームを提示され続けているということである。

4.1.2. 問題があるとされる子どもについての語り

ここまででは、直接好ましいと表現されている子どもに関する語りについてみてきた。しかし、好ましい子どもの状態は、教師が問題があるととらえている子どもについての語りからも浮き彫りにすることはできるのではないだろうか。そこで、教師がどのような状態の子どもを問題であると感じているかについてみていきたい。

まず、小学校教師は、前項と同じ小学校3年生の担任教師である。この語りは、クラス内での子どもたちの態度や友人関係について筆者が質問していた時のものである。

【語り 4】小学校教師にとって問題があると感じられる子どもに関する語り

教師 A：そういえば気づいてました？ eくん。

筆者：eくんですか？彼、優しそうな感じの子ですよ。

教師 A：そうやねん。あの子見た時には、もう天使なんちゃうかと思ったわ。

今まで〔インタビューは10月〕見てきたけど、1回も誰かの悪口も文句も言ったことないんやよ。さらに顔もきれいやし、表情も常に笑ってるやん。で、成績も抜群やしね。こんな子初めて見た。あ、違う。eくんのお姉ちゃんもあんなんやったな。

筆者：でもすごいですね。1度も嫌な事言わないなんて。

教師 A：そうやねん。逆に気持ち悪い感じもせえへん？こんなこといったら問題かもしれへんけど、子どもっぽくないし、人間としてもこれからあんなんでいいんかなって思う時があるんよね。何かたらへん〔足りない〕。

筆者：え？どういうことですか？

教師 A：なんか子どもって、やっぱりいろんなことに興味持ってじっとしてられへんかったり、ちょっと勝手なこと言ってほかの子と喧嘩したりするもんやと思うんやけど。eくんは、違うねん。一緒にいる子が勝手なこと言っても、いつも笑って受け入れるんよね。で、みんなが嫌がってやらへんようなことを1人でやってんねん。信じられへんよ。放課後とか休み時間とかに、遊ばんと1人でごみ拾ったり

花の水替えとかしてて。

筆者 : それは本当にすごいですね。パーフェクトですね。

教師 A : でも、友達はおらへんねん。

筆者 : そういえば、決まった子と一緒にいる感じじゃないかも。

教師 A : そうそう。誰とでも上手くいくし、何となく誰かといっしょにおんねん [いる] けど、ものすごく親しい子はおらへんねん。ほかの子らもちよっと1歩引いてる感じというか。出来過ぎてても楽しくないかもね。私らの前にいる時と、子どもらという時と同じ態度やもん。あれは遊んでておもしろないわ。

この小学校教師の語りを聞いた時、筆者は驚き、強く印象に残ったことを今でも覚えている。まったく問題行動もなく、クラス内の誰からも良い子だと言われ嫌われることなど想像もできない e に対して、問題があるとする発言に驚いたのである。この小学校教師の語りからは、品行方正でまったく問題がない子どもの方が、逆に問題があるととらえられていることがわかる。子どもは、自分勝手な行動をとったり、喧嘩をしたり、大人の前と子ども同士ではそれぞれ異なる態度をとったりするものである。にもかかわらず、自分をほとんど出さずに他の子どもたちに合わせて行動する e は、子どもとして問題があり、その態度は「子どもっぽくない」ものであると教師 A は感じているのである。ここから、まったく問題がない子どもよりも、多少自己中心的な行動をとる子どもの方が教師にとって好ましい子どもとしてとらえられていることがわかる。

さらに、中学校教師の語りについてもみていきたい。この語りは、前項と同じ中学校2年生の担任教師である。この日は、6時間目の HR でスキー合宿の計画について説明され、部屋割りと班が決められた。【語り5】は、その時の様子について放課後ふりかえっている時に出てきたものである。

【語り5】中学校教師にとって問題があると感じられる子どもに関する語り

教師 B : 問題といえば、今日、スキーの班決めしたでしょ。俺、冷や冷やしたわ。

筆者 : ああ、f さんや g くんのことですか。

教師 B : そう。好きに班決めさせたら、絶対残るとは思ってたけど。

筆者 : でも、g くんは結構早く男の子たちが入れてくれましたね。

教師 B : こういう時男子はこだわらへんからいいねんけど。女子がな。絶対入れたがらへんもんなあ。本人も自分からは動けへんし、なんか覇気もないしなあ。勉強だけできてもあかんねんよなあ。

筆者 : 今回〔スキー合宿〕、班の人数が部屋の〔広さ〕せいで〔あらかじめ〕決まっていたからね。

教師 B : そうやねん。あれがきつかったな。普段入れてくれる女子んとこに入られへんかったからなあ。いっつも、グループ決める時は、あいつら大丈夫なんかなって心配になるわ。とにかく誰かと一緒になってくれるだけでも良いんやけどなあ。

【語り 5】のような問題は、誰でも 1 度は目にしたことがあるものだろう。f や g は、普段は成績もよく教室内であまり目立たない存在である。しかし、学校生活では、様々な場面で集団を作る必要がある。この時、集団からはみ出てしまったり、1 人になってしまったりする子どもは、常に教師の悩みの種である。クラス内でうまく仲間集団に入れられない子どもや積極的に関わることのできない子どもは、成績や授業中の態度に関係なく、問題のある子どもであるとみなされてしまう。このような子どもの様子は、好ましい子どもとして語られていたものと真逆のものである。好ましいとされる子どもは、他の子どもたちを巻き込みながら元気に行動することができるが、【語り 5】でとりあげられている子どもは、自分から他の子どもと関わることが得意でなく、多くの場合 1 人になってしまう。ここから、他の子どもとうまく関わることができる子どもという、教師が考える好ましい子どものイメージをみることができる。

最後に、高校教師の語りについてみていきたい。この語りは、前項の担任教師でなく、学年主任をしていた 50 代の女性の国語教師に対して、学年全体の雰囲気や状態について質問していた際に出てきたものである。

【語り 6】高校教師にとって問題があると感じられる子どもに関する語り

教師 D : この間、h くんが髪の毛染めてきたんですよ。びっくりして思わず

声かけました。

筆者 : 脱色してきたってことですか？

教師 D : ううん。違う違う。それまで金色だったのを黒くしてきたんですよ。

筆者 : え、じゃあ問題ないんじゃないか…

教師 D : そうじゃないんですよ。hくんはもうずっと髪の毛いじってた〔通常と異なる状態にしていた〕んですよ。それって、彼なりの主張やっただと思うんですね。それやのに、急に目立たない色と髪型にするのは、反対に何か問題を抱えているからなんじゃないかと思って。

筆者 : そうか。急に派手になるのと反対の状態も何かのサインなんですね。

教師 D : そうなんですよ。どんな状態であっても、普段と違うものになるのが問題なんですよ。特に彼は目立っていたし、元氣もよかったのに、急におとなしくなったのが心配で。

高校生が髪の色を変えたり化粧に興味を持ったりするのは、よく見られる状態である。しかし、【語り 6】で教師が語っている事例は、その反対のものである。通常、髪を急に明るくしてくる方が、問題行動としてとらえられる。ところが、この教師の語りでは、これまで人と異なる状態を自ら作り出していた子どもが、急に他の子どもたちと同じ外見になってしまい、態度も同様に目立たなくなってしまうことに問題があるととらえられている。ここからも、小学校教師の語りと同様に教師は、子どもが自分の言いたいことややりたいことをダイレクトに表出することを問題とはとらえていないことがわかる。むしろ、自分を抑えている状態が問題であり、子どもとして好ましくない状態であるとしているのである。

このような、フレイミングの誤りが校種に関係なくとらえられていることは、子どもたちにもその都度あらためてフレイムを再認識させ、強化していくことにつながると考えられる。

ここまで教師による、好ましい子どもと問題があるとされる子どもについての語りを見てきた。教師たちは、一様に元気で素直でクラス内の子どもたちと円滑に交流することのできる子どもを好ましいととらえていた。そして、多少の自己主張や問題行動は、子どもであることの一部であるとして許容してい

た。反対に、元気がなく自分自身を抑え込んで他の子どもに合わせすぎたりまったく他の子どもたちと関わりを持ってなかったりすることの方が問題であると、とらえていた。通常、学校における子どもの行動は、成績が良く問題行動がみられないことの方が好ましいと考えられがちであるが、教師にとって、好ましい子どもの状態である「子どもらしさ」は異なるのである。そして、この様な教師たちの価値観は、どの様な状態が「子どもらしい」のかを周囲に対して無意識のうちに示していると考えられる。

4.2. 子ども同士で語られる「子どもらしさ」

ここまでは、教師によって語られた「子どもらしさ」について分析をおこなってきた。本節では、子どもたち自身がどのような子ども（友人）に憧れている（好ましいと感じている）のか。または、自分では好ましいと感じていないが、自分よりも好ましいイメージを持たれている子ども（友人）をどのようにとらえているのかについてみていきたい。

子どもたちは、1学級に30～40名近く所属しており、それぞれの子どもが多様な語りを聞かせてくれた。しかし、本節では、すべての語りを紹介するには紙面が足りない。そこで、筆者が分類した仲間集団（池田2013, 2006）の3分類の内、2集団の語りを紹介することにしたい。選択した2集団は、授業に関連のない発言が多く学級内で常に5人以上友人がいるとする〔集団1〕と、授業に関連する発言が多く勉強は得意であるが学級内に友だちはおらずかであるとする学級内で〔集団1〕とは対極に位置する〔集団2〕である。紙面の都合上中間層は、今回とりあげないことにする。

【語り7】小学生による好ましい子ども（友人）

〔集団1〕

i さん：j くんたちは友達も多いし、一緒におって [いて] おも [し] ろいよな。

k さん：まあ、うるさい時とか、いらんことする時もあるけど、楽しいしドッジ [ボール] とかめちゃうまいで。

i さん：せやねん。でも、今は前よりいらんこともしてけえへん [してこない] で。

筆者 : じゃあ、一緒に遊びたい？

kさん : やってることによる。一緒におっても、横で見てるだけやったらなあ。

iさん : でも、昼休みとか一緒に遊ぶ方がおもしろいやん。

kさん : せやな。それはそう。

[集団 2]

筆者 : 普段は誰と遊んでるの？

lくん : mくんとかnさん。

筆者 : そっか。いつも3人で遊んでるの？

lくん : うん。でも、学校でだけ。

筆者 : じゃあ、[学校外では] ほかの子と？

lくん : ううん。だって誘ってくれへん。jに教えてって言っても、遊んでるところ [場所] ハテナハテナとか言っても教えてくれへん。

小学生の好ましい子ども (友人) のイメージは、友人が多く元気な子どもであることがわかる。筆者の観察の結果、iやkは、クラス内でも流行に敏感で活発な女子集団に属している。そして、jたちの活発な男子集団とは、休み時間や放課後に公園などで一緒に遊んでいる姿が頻繁にみられた。もう1つの事例である、lは、おとなしく目立たないタイプで休み時間などはmやnとともに3人で行動している。そして、lの語りからは、jたちに遊んでいる場所を教えてもらえないことや誘ってもらえないことから友人であるとは認識していないが、jの集団と遊びたいとは感じていることがうかがえる。結果、このような小学生たちのイメージは、小学校教師による好ましい子どものイメージとほぼ同じ内容であることがわかる。

つぎに、中学生が好ましいと感じている子ども (友人) についてみていきたい。中学生は、小学生に比べて明確に自己の所属集団と他集団の違いを認識している。

【語り 8】中学生による好ましい子ども (友人)

[集団 1]

oくん：自分だけ浮いとったら、それはやばい [問題がある] やろ。まずいでそれは。

筆者：そうなの？浮いてるってどんな感じ？

oくん：俺らはさ、ノリで生活してんねんから、ついてってへん [仲間のタイミングについていけない] ってことやろ。俺かてそんなヤツいらんし。ならんように気いつけとかなあかんやろ。

[集団 2]

pさん：私は、1人でおん [いる] のは、あんまり気にしませんけど。おりたい時に [一緒にいたい時に友だちの所へ] 行くなって感じですか。

筆者：じゃあ1人でいても大丈夫って感じ？

pさん：もちろん、誰もいいへん [いない] っていうのは困りますよね。そこは、少なくともちゃんと確保しといてって感じですか。そうしとかんと いろいろ困る と思いますよ。毎日。

筆者：そうか。グループ組むとき困るもんね。ほかの子たちとは一緒にいようと思わないの？

pさん：あの子たち [クラス内で活発な集団] と私はまったく話し合わないで。ま、クラス動かしてんのは向こう なんて、何か一緒にする時は合わせますけど。

中学生の好ましい子ども (友人) のイメージも、小学生と同様に教師のイメージと重なっている。特に、ノリの良さは教師も言及していたが、クラスの人気者である o 自身も自覚していることが興味深い。そして、ノリの良さだけでなく、クラス内での現在の印象や立場を守ることの重要性を認識していることもうかがえる。さらに、p 自身も、教師が問題であると注目していた、仲間集団からはみ出してしまおうことのないように気をつけていることがわかる。そして、自分とは価値観が合わないとしながらも、クラスの中心となっているの発言力のある集団については明確に認識していた。このような中学生たちのイメージも、教師の好ましい子どものイメージや問題を抱えている子どものイメージと多くの部分で重なっていた。

最後に、高校生の抱く好ましいと感じる子ども（友人）についてみていきたい。高校生は、中学生と同様、明確に所属集団と他集団を分けてとらえていたが、中学生とはどのような違いがみられるのだろうか。

【語り 9】 高校生による好ましい子ども（友人）

〔集団 1〕

q さん：えー、ここん【ここの】クラスの中でも一緒にいたい子とそうじゃない子はどの子もちゃんとわかっていると思いますよ。

筆者：やっぱり違ってかなりあるもの？

q さん：そりゃ、かなりありますよ。どんな衣着てきてるかでもわかるし。おしゃれな子とかは帽子とかかぶってきてる子もおる【いる】し。r ちゃんなんか中 2 人時から毎日化粧してきてますよ。気づいてませんでした？アイメイクばっちりですよ。でも、可愛いから許されるし。

筆者：そうだったの。気づかなかったー。

q さん：r ちゃん可愛いですよ。え、一緒におったら【行動していたら】うち【私】もなんかちょっとくらいマシになる気がしたり。いつもめっちゃ楽しくてつい騒ぎすぎたりするけど。男子と行動すんの【機会】も結構あるし。

〔集団 2〕

s さん：クラスの中の子たちの違いは大あり【大きくある】。

筆者：そんなに違うの？

s さん：そりゃそうですよ。まず、教室の後ろとか騒いでる男子と女子。あいつらは可愛い子とかまあまあモテる奴も多いし。でも、別に無理してあそこまでしなくてもいいんじゃないのって思うこともある。ちょっとやりすぎなんちゃうとか。一体誰に気に入られたいんって。学校みたいなちっちゃいとこで真ん中にいたって別に意味ないし。

筆者：そっか。じゃあ、ほかの子たちはどう？

s さん：あとは、ふつうの子ら。まあ、勉強もそこそこしてるし、そんな見

た感じもやりすぎてない感じの。まあ、いい人たちですよ。うっとこ[私たち]は、変なやつらの集まりですかね。それなりに極めてるっというか。半端な人はあんま[あまり]いませんって感じ。みんなすごいですよ。

高校生が感じている好ましい子どものイメージは、中学生までと同じ部分と異なる部分がある。まず、教師が感じている好ましい子どものイメージは、やはりクラスを中心にいる子どもたちにおいてほぼ当てはまっているようである。しかし、高校生の持っているイメージは、中学生に比べて、クラスを中心集団と自己の所属集団をより明確に認識するようになってきている。さらに s が発言しているように、クラス内には、自分たちとは異なる中心集団があるが、それは、学校という組織の中だけのものなのではないかという疑問や、クラスを中心にいる子どもたちを良しとする価値観が、どこか自分たちクラスのメンバー外から持ち込まれたものではないのか、ということに気づき始めているととれる発言は非常に興味深い。それだけでなく、s は自分たちの友人関係のあり方にはある程度満足している様子もみとれる。

ここまで、小学生、中学生、高校生の学校で好ましいとされる子ども（友人）についての語りを順にみてきた。その結果、子どもたちの持っている好ましいとされる子ども（友人）のイメージは、教師の抱えている好ましい子どものイメージとほぼ一致していることがわかる。この結果は、教師が子どもたちの前で言語化したり、態度として明確に表現していたりしていなくとも、子どもたちはどのような子ども像が教師から望まれているかを理解しているということである。さらに、子どもたちは、教師が問題であると感じている子どもについてもかなり正確に把握しており、より好ましい子どものイメージに合わせようとしていることもわかる。これは、すべての子どもが大人と同じフレームを用いているわけではないが、高校生の語りの〔集団 2〕の子どもなどは、2つのフレームを用いて自分たちの日常用いているフレームを変換して合わせていく必要があるとしていることは非常に興味深い。子どもたちは、教師と同じフレームを用いることによって、適切にプラクティスを運用する必要性を感じているのである。

5. おわりに：「子どもらしさ」がはらむ問題

本稿は、ここまで教師と子ども自身から語られる、好ましい子どものイメージを明らかにすることで、「子どもらしさ」とはどのようなものであるかを分析してきた。結果、教師の抱いている「子どもらしさ」は、1) 素直で元気な子ども、2) クラス内で他の子どもたちと問題なく関係性を形成できる子ども、3) 多少の自己主張や問題行動も「子どもらしさ」の1つである、という3点が小学校から高校まで共通してあげられていた。

そして、子どもたちも、教師と同様に「子どもらしさ」を理解し実践していた。しかし、すべての子どもが教師の求める「子どもらしさ」に合致するように行動できるわけではない。合わせる事が可能な子どもは、クラスの中心に位置し、より学校生活を積極的に楽しく過ごそうと工夫し、さらに、過ごすことが可能であった。反対に、合わせる事が困難である子どもは、教師が求める「子どもらしさ」を理解しながらもそれが難しい中で、可能な限り自尊心を保ち、より問題のない状態で学校生活を送るためにはどうすればよいかを日々考えて慎重に行動していた。

以上のように、教師だけでなく子どもたちも同様の「子どもらしさ」を運用するという事は、同じフレームを共有し、安定した相互行為秩序としての学校文化を形成するために必要なことだと考えることもできる。

しかし、「子どもらしさ」の影響は、学校内に一定の価値観を形成し再生産しているだけではない。この影響は、仲間集団の階層性にも影響しているのではないだろうか。

筆者は、これまで小学生、中学生、高校生の仲間集団について研究を行ってきたが、公立の小学校でも、成績によって選抜され一定以上の家庭環境の子どもが集まっている中等教育学校でも、必ず元気で活発な明るい子どもたちが多くの友人を獲得し、クラスの中心に位置していた。さらに、本稿では紙面の都合上とりあげることができなかったが、筆者は、今回データを提示した中等教育学校より、さらに偏差値の高い私立女子高校に通う子どもに対してもインタビューを行っている。その結果からも、本論文で確認してきた結果と同様にク

ラスの中心となる子どものタイプは、元気で活発なおしゃれに興味のある子ども、またはスポーツのできる子どもであることがわかっている。同様の階層性は、鈴木（2012）の「スクールカースト」でも示されている⁽²⁾ことから、このような特徴は多くの学校において適用できるものであると考えられる。

それでは、なぜ校種や学校背景が異なるにもかかわらず、同じタイプの子どもが常にクラスの中心となりやすいのだろうか。この疑問に対する答えの1つが、今回分析してきた「子どもらしさ」ではないかと考えられる。好ましい子どものイメージとしての「子どもらしさ」は、教師だけが保持しているものではない。学校外の社会においても、メディアや学校関係者以外の大人が同様の「子どもらしさ」を当然のものとして使用している例は、ドラマやアニメ、漫画の主人公を例にとればいくらかでも確認できる。「子どもらしさ」はただの好ましさの一例ではなく、適切なプラクティスの運用の結果である常識的な枠組みとして、仲間集団の階層性の再生産にも適用されているのではないだろうか。そして、「子どもらしさ」は、現在だけでなく、今後も当たり前の価値として再生産され続けていく可能性が高いと考えられる。

また、今回は「子どもらしさ」の影響に関して対象を小学校・中学校・高校の教師と子どもに絞り、「子ども」として好ましいとされる状態を描き出したが、子どもの頃から好ましいとされてきた価値基準が、成人した途端に切り替わるとは考えにくい⁽³⁾。この「子どもらしさ」として求められている状態や態度は、就職の際や社会で求められる「社会人らしさ」などに名前を変えることによって、さらに社会全体に浸透しているとは考えられないだろうか⁽⁴⁾。好ましい「子どもらしさ」は、「好ましい人間像」として今後の社会で成功し、階層移動を可能とする要因の1つとなり得るかもしれないのである。この点に関しては、今後さらなる課題としてさらに綿密な調査や分析が必要となってくるだろう。

注

- (1) 子どもを定義する際の上限として成人まで考える際、2016年7月から施行される選挙権年齢の変更も今後は視野に入れなくてはならないと考えられるが、本稿では現時点での成人年齢を基準とした。
- (2) 鈴木(2012)では、人気のある子どもについて、小学生では「みんなで遊ぶのうまい子」(鈴木2012, p.92)や「男子が誘いに応じる確率の高いグループ」(鈴木2012, p.93)などがあげられている。中学生・高校生では、「イケてるグループ」(鈴木2012, p.103)ととらえられ、一番上のグループにいるほど「学校生活はとて『充実』しており『楽し』かった」(鈴木2012, p.117)とする発言が取りあげられている。そして「グループの力の強さは、学校生活の楽しさとはほぼ一緒」(鈴木2012, p.118)とさえ語られている。
- (3) 大学教員の語りからみても、類似した価値基準をみることができる。

【語り10】大学教師による好ましい学生に関する語り

教員E: 大学でいいなと思う学生は、やっぱり自分から色んなことに興味を持って、積極的にチャレンジしていく子ですね。その時に大事なことは、初めから自分に合う合わないって決めつけないで、とりあえず試してみること。

【語り11】大学教員にとって問題があると感じられる学生に関する語り

教員F: うちの大学〔地方国立大学〕は、まじめな学生が多いよね。

筆者: まじめって勉強が得意とか、おとなしいとかですか？

教員F: うーん、例えば、課題を出したりするでしょ。そうしたら、すぐに研究室までやって来て「先生、どうやって調べたらいいですか」って聞いてくるのよ。それで、また少ししたら「先生、できました。つぎは何をすればいいでしょうか」ってやってきて、それをこっちが「頑張ったね、よくできていますよ」って言うまで続けるのよ。とにかく、指示待ちで、間違えたり、失敗したりするのが怖いんだと思うんだけど。

- (4) 現在の企業において必要とされる人材に関しては、様々な研究が行われている。例えば、東証一部上場企業と岡山大学に求人依頼のあった企業を対象に行った調査結果は以下のとおりである(宮道・三浦ほか2013)。企業の規模単位ごとに求める能力の上位をあげてみると、従業員数1000人以上の企業は、1位. 基礎学力、2位. 協調性、3位. 行動力、4位. ストレス耐性、5位. 意欲、6位. 素直さとなっている。従業員数300～1000人未満では、1位. 基礎学力、2位. 協調性、2位. 行動力、4位. 意欲、5位. 明るさ、6位. 素直さとなり、従業員数300人未満では、1位. 素直さ、2位. 意欲、3位. 基礎学力、3位. 行動力、5位. 協調性、6位. 明るさとなっている。このような特徴を順にみていくと、「子どもらしさ」の特徴と重なる部分が多いことは明らかである。

引用文献

- ・Ariès, P.,1960, "L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien régime, Plon. (杉山光信・杉山恵美子訳 1980『子供』の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家庭生活—) みすず書房)
- ・Goffman, A.,1974 "Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience" Harper & Row.
- ・Goffman, A.,1959 "The Presentation of Self in Every life" Doubleday Anchor(石黒毅訳 1974『行為と演技—日常生活における自己呈示—』誠信書房)
- ・Goffman, A.,1963 "Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings" Glencoe, IL: Free Press (丸木恵祐・本名信行訳 1980『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』誠信書房)

- ・ Goffman, A., 1961 “Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction” Bobbs-Merrill. (佐藤毅・折橋徹彦訳 1985 『出会いー相互行為の社会学ー』 誠信書房)
- ・ 池田曜子 2006 「中学生の学級内での位置認識ー子どもの視点からみた集団形成から」『人間文化研究科年報』 第 21 号、pp.91-102
- ・ 池田曜子 2013 「学級内における仲間関係ー子どもたちの所属集団同士の差異化戦略」『人間文化研究科年報』 第 28 号、pp.173-189
- ・ 神田靖子・高木佐知子 2013 『ディスコースにおける「らしさ」の表象』大阪公立大学共同出版会
- ・ 北原保編 2010 『明鏡国語辞典』大修館書店
- ・ 宮道力・三浦孝仁・坂入信也・中山芳一・岡山大学キャリア開発センター・朝日医療学園 2013 「企業における採用活動の実態と新規学卒者に求める能力に関する実態調査報告」『大学教育研究紀要』 第 9 号、pp. 233-244
- ・ 新村出 2008 『広辞苑 (第六版)』岩波書店
- ・ 大橋純・大橋裕子 2013 「『らしさ』の語用論的考察ー電子掲示板に見え隠れする玉虫色の社会規範ー」『ディスコースにおける「らしさ」の表象』大阪公立大学共同出版会、pp.35-66
- ・ 鈴木翔 2012 『教室内カースト』光文社新書
- ・ 安川一編 1991 『ゴフマン世界の再構成ー共在の技法と秩序ー』世界思想社